

2024年 4月 30日

## 日本災害復興学会 2022年度研究会 活動実績報告書

<研究会名称>

災間の災害復興研究会
------------

代表者	宮本匠
企画分担者	稲垣文彦
	山崎真帆
	岡田憲夫
	野坂真
	小林秀行
	頼政良太
	立部知保里

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

<p><b>【課題、目的】</b> この研究活動を行った動機や目的を記入してください。</p> <p>・災害が常態化した社会を「災間（さいかん）」とし、同じ被災地が短期間のうちに何度も被災するような状況におかれた「災間」の時代の災害復興にどのような問題が生じるのかを明らかにする</p> <p>気候変動により、災害が頻発化、広域化、激甚化するようになってきた。その中で、短期間のうちに繰り返し被災するような被災地も散見されるようになってきた。社会学者の仁平典宏氏は、東日本大震災後に出された論考の中で、「災間（さいかん）」という概念を提示した。仁平氏の含意は、来る災害に備えて、災害時にもっとも大きな被害を被る弱い立場に置かれた人たちをどのように守るかという視点から社会を根本的に変えていくべきではないかというものだったが、その主張に賛同した上で、「災間（さいかん）」を災害が常態化した社会、災害の間（なか）にある社会と捉えて、この語を用いて、具体的な被災地における活動から分析を行うこととした。</p>
--



<p><b>【実施方法、内容】</b> この研究活動の実施方法、内容を記入してください。</p> <p>佐賀県武雄市で活動する一般社団法人おもやいのスタッフへの聞き取り及びフィールドワーク、そしてオンラインによる研究会でその内容を分析、考察した</p> <p>佐賀県武雄市は、2019年と2021年の2度にわたって同じ地域が水害で被災した。武雄市には、1度目の被災の後に、社会福祉協議会が設立・運営する災害ボランティアセンターを補完する目的で、民間の災害ボランティアセンターを設立したことがきっかけとなって、その後も活動を続けている一般社団法人おもやいが存在する。そこで、おもやいのスタッフに研究会のメンバーになってもらい、オンラインで開催する研究会に参加してもらいながら、具体的に取り組んでいる活動や、そこで見られた課題を共有してもらうこととした。また実際に現地を訪問し、おもやいの活動に参加しながら観察を行った。第1回研究会（2022年6月28日）では、研究会の目的と互いの関心の共有を行った。第2回研究会（2022年8月4日）では、佐賀県武雄市の水害対応の事例を学んだ。第3回研究会（2022年9月9日）では、災間の分析の鍵概念になると考えた「中動態」概念の可能性を検討した。これらの成果を、2022年の災害復興学会で「分科会1 災間の災害復興の課題と可能性」として報告し、議論を深めた。そして、第4回研究会（2022年10月21日）では、その振り返りを行った。第5回研究会（2023年11月9日）では、「災間」概念の提唱者である仁平氏を招き、研究会の議論の内容を報告するとともに、さらに議論の掘り下げを行った。2024年2月に武雄市を研究会メンバーで再度訪問し、議論の成果を現場に報告する予定であったが、能登半島地震の発生により研究会メンバーの多くが対応をすることになり、武雄市からも能登半島へ支援が行われたことから、現地訪問は年度内の実施を断念することとなった。</p>
--



<p><b>【活動成果】</b> この研究活動で得られた成果を記入してください。</p> <p>「災間（さいかん）」という概念をどのようなものとして位置づけることが実践的に有効なのかについて、多様な論点を提示することができ、「災間」概念の可能性を広げることができた。</p> <p>武雄市の活動から見てきたのは、災間の時代におけるガバナンスの再編の必要性についてである。おもやいが活動対象としてきたのは、行政や地縁による支えからこぼれ落ちるような人々だった。行財政改革により行政機能はかつてと比べて大幅に縮小している。また、少子高齢化の進展、共同体の空洞化により、地縁・血縁も希薄化しており、かつての相互扶助や公的支援からこぼれおちてしまう領域が拡大していることが、おもやいの活動から見てきた。おもやいはそれらの人々を「支援」ではなく、ご近所どうしの「おせっかい」という言葉で支えようとしているところに独自性がある。支援する側、される側と分けるのではなく、同じ地域に住むものどうしという視点で展開している活動は、地域におけるガバナンスの再編をはかっているようにもみえ、他地域での今後の災害対応、災害復興にも有効な知見を提供すると考えられる。</p> <p>このような支援する側とされる側を明確に線引きしないような見方は、近年改めてその考え方が注目されている「中動態」にも通ずる点がある。社会資源が減少していく中で、どこか特定の主体、領域に支援の担い手を定めるといよりも、みんながみんなを支えあうというような考え方、また実践のあり方の有効性をおもやいは示唆しているように考えられた。</p> <p>さらに、災間について概念的にも議論の深堀を行った。まず「災」に着目すると、「災」にも東日本大震災のような歴史を区切るような「災」もあれば、カタストロフィックではない「災」があること、当初の仁平氏の概念はどちらかというと前者を含意していたが、後者のような視点でも捉えることの必要性が研究会の議論からわかってきた。さらに、それぞれの「災」をただ別個のものとして扱うのではなく、入れ子構造のように存在すると考えることも重要であることが見てきた。災間の「間」に着目すると、この「間」についても「災いと災いの間のつかの間の平時」としてみるのか、それともはや「間」のない、災害が常態化したものとみるのかによる違いがあることもわかった。</p>
---

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。

(例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等)

<p>本研究は実践と並行しながらそれを考察するという形式をとったため、まずはおもやいで活動する人々にとって、研究会という場で、現場で起きていることの相対化や整理が少しでもできていればありがたいと考えている。おもやいの人々からは、とても具体的な実践の中での課題、悩みを共有していただいた。例えば印象的だったもののひとつに、2度目の被災をされた方がおっしゃった「なさけない」という言葉がある。1度被災をしたため、2度目の被災の後もどのような処置、対応が必要なのかはわかっている。1度目の被災の後、そのような処置、対応がわかることがその人の安心感、復興感につながったが、2度目の被災の後はそのようではない。どうせまた被災するのだとしたら、何をしてもむだではないかという感覚が被災者にあるからだ。そこでの被災者支援は、これまでの被災者支援の中ではあまり経験されてこなかった（しかし潜在的には存在したかもしれない）問題を提起していると考え。そこで、おもやいではこうした方々と、とにかく時間をかけて、ゆっくり一緒に対応を考えるということを大切にされていた。このような「否定性」が「災間」の時代には大きな課題となることが発見されたことは、実践的にも、また今後の災害復興研究にとっても重要なことと考える。</p> <p>今後はおもやいで活動への参加を継続しながら、他の「災間」にあるような被災地でも同様な問題が生じるのかなどについても検討を行いながら、さらに論点を整理し、場合によっては科研費等の研究資金への申請を行って研究の継続をしたいと考えている。</p>
--